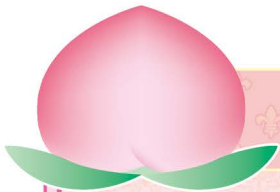


聞
き
流
さ
ず



留
田
響



聞き流さず 留意

やることが多くて忙しかったり、情報量が多くて処理が大変な時、ついつい大事なことで聞き流してしまうことはないだろうか。溢れる情報に耳を傾け、情報の入り口はオープンにしつつ、必要な情報と不要な情報とを振り分けられる達人を目指そう。まずは、聞き流さずに留意、この心がけで業務にあたれ。

◆ 甲陽軍鑑に学ぶ安全⑩

義元公の聞く耳

栄光と破滅

今川義元公は、信玄公の姉婿にして信玄公の嫡男義信公の舅である。博学の僧侶太原雪斎の補佐を受け、若くして駿河、遠江、三河3ヶ国の大大名となった。しかし、太原の死去後、織田信長の策略にかかり、配下で、織田家の情報を逐次報告する戸部政直を弁解も聞かず処刑するなどしたため、一五六〇（永禄3）年の桶狭間の戦いで、2万の兵力がありながら7百の織田軍に討ち取られてしまった。

その義元公に、かつて山本勘助が仕官を申し出たことがあった。軍法も剣術も一流であるで紹介され、手柄をあげながら9年待ったが、ついに義元公は取り立てなかつた。醜男であり、隻眼、手指

や足の不自由という山本の外見からである。一方、武田家では山本の能力が評判となり、召し抱えることとなった。信玄（当時晴信）公は山本と対面すると、様々なハンディキャップがありながら名声が高いのはよほど優れているのであると考へ、即座に知行（給料地）を増した。山本は、（第4次）川中島の戦いでは謙信公に屈したものの、それ以前の数々の戦いで華々しい活躍を果たし、武田家の繁栄に大いに貢献した。

太原には聞く耳を持って輝いた義元公。戸部や山本らには聞く耳なく、信玄公と正反対の結末を迎えてしまった。

* 出典：品6、11、24



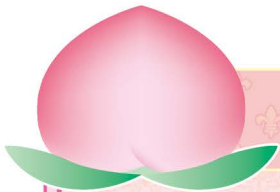
若氣に注意



敬又小眞鍛金鍊

けいしん

たんれん



若気に注意 敬慎鍛錬

慣れてくると、度を越えて調子に乗りがちなのが若さの悪さ。経験不足があるのだから、先人たちを敬い、慎む、そして鍛錬を積む。その前提で物事に若者らしく澁刺^{はつらつ}とチャレンジし、上を目指す。こんな心がけの若者ならとてつもない力を発揮できるだろう。間違っても思い上がりだけで突撃しないこと。

◆ 甲陽軍鑑に学ぶ安全 ①

若気の至りへの気づき

義信公と信玄公

(第4次)川中島の戦い最終盤、

武田軍本陣に千人を超す上杉軍

部隊が接近した。信玄公は、本

陣の人数が少ないことから、も

し謙信公の部隊であれば危険と

考え、撤退を指示した。しかし、

義信公は強気に拒否した。結局、

その部隊はそのまま撤退し、また、

謙信公でなく甘粕隊であった。義

信公は戦後、撤退すべきでなかつ

たと信玄公をいつまでも批判し

た。挙句、謀反まで起こそうとし

て身を滅ぼした。義信公は若さゆ

えに無謀に陥った上、些細な結果

論に固執し、自重できなかった。

信玄(晴信)公も若気の過去が

ある。家督相続直後、信濃勢を

4度撃退し傲慢になり、家臣を

無視して連日連夜遊び呆けてい

た。そんなある

日の歌会で、文盲で歌が詠

めないはずの板垣信方が立派に歌

を詠み信玄公を驚かせた。板垣

は陰で猛勉強していた。板垣は尋

ねる、もっと上手になるにはどれ

ほど習えばよいでしょうかと。信

玄公は答える、今後も努力して

いけば全然苦勞しないだろうと。

板垣は切り出す、好きなことば

かりやつて努力しない晴信公は信

虎公に勝るとんでもない悪大将で

す、ご立腹ならこの板垣をどう

ぞご成敗くださいと。信玄公は

己の愚かさに気づき、涙を流して

反省し、行いを正すと誓った。

若気は多少は仕方ない。大切な

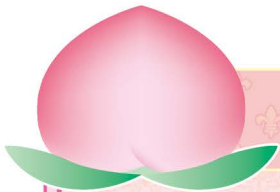
のは敬慎の心を失わないことだ。

* 出典：品12、19



薬は毒 毒が薬





薬は毒 毒が薬 細心注意

薬は効き目があるから薬である。効くということ
は体に影響を及ぼすということであり、その点、毒
と同じである。影響が良い程度にとどまれば薬、そ
れを超えると毒。単に呼び方が変わるだけだ。都合
良いことばかり見るな。毒の怖さはすなわち薬の怖
さ。それを忘れると大変な事態を招く。

◆ 甲陽軍鑑に学ぶ安全⑫

長篠の戦い

強すぎて敗れた勝頼公

信玄公の四男勝頼公は武勇の誉れ
高く、数々の戦功をあげた。三方ヶ
原の戦いでのおぼろげな働きもあざ
やかであった。そして、強すぎると
まで言われる大将となった。

武田家を継いだ勝頼公は一五七五
(天正3)年、徳川方の三河国長篠
城を包囲した。対し、家康公が出
陣するとともに信長公自ら援軍とな
り、大軍で近くの有海原あるみはらに押し寄せ
た。武田軍は軍議を開き、馬場信春、
内藤昌秀まさひで、山県昌景やまがたまさかひら多くの重臣は
撤退を進言した。しかし、徳川・織
田連合軍相手に大活躍した過去を
持つ勝頼公は決戦を選んだ。この時、
武田軍は留守の守りや長篠城の備え
などに兵を割いたため1万2千。一
方、連合軍は後から見積もった数字
で7万余。劣勢の武田軍は土屋昌統まさむね
の捨て身の突撃をはじめ起死回生の
波状攻撃を敢行し、連合軍の三重柵
を一部突破するなどしたが、どんど



ん消耗していった。
しかし引き下がらない。馬
場隊では、馬場自らは死を決し踏み
とどまることを選びつつ、部下に退
却を命じたが、誰一人逃げず馬場
を見捨てない。このような形で多く
の部隊が長時間戦線を維持したが、
衆寡敵せず、馬場、内藤、山県、
土屋以下名だたる武田武者が数多
く討ち死にし、武田軍は壊滅した。
強いがゆえに勝頼公は無謀な戦い
を仕掛け、武田軍は戦い続け、惨
事となった。決して好戦的になっては
ならない、というのは信玄公の勝頼
公への遺言。この遺言虚しく、勝頼
公は真の名将となれず、武田家も
衰退の道を歩んだ。強すぎる勝頼
公は、強い効果と激しい副作用を併
せ持つ毒劇薬のような存在である。
万事、良い効果ばかり見て、裏に潜
む副作用を忘れると大失敗が待つ。

* 出典：品14、39、52